

伝承・遊び

「角風（ブンブンだこ）」の一考察

五十嵐 武晴

一、はじめに

「ブーン・ブーン」…糸を引くようなかすかな音が聞こえ始めると、誰もが春を感じた。

この音は雪が消えると男の子達が競って海岸で揚げる「ブンブン風」から流れてくる音。

西の日本海にむかって数えきれないほど揚がっている「ブンブン風」は、春を告げる風物詩の一つでもあった。

この「ブンブン風」は、全て子どもの手作り、大人の手は一切借りなかった。もともと大人は増産、増産の時代であるから子どもの遊びなどに関わっている暇などあるわけがない。また節約の時代、子どもの玩具など売っ

ているわけではない。

唯一の玩具らしきものといえば、家庭常備薬販売のため年に一回やってくる越中富山の万金丹売りが景品に持つてくる紙風船、大喜びしても所詮女の子の玩具。だから男の子は、高学年の先輩が作る「ブンブン風」を見よう見真似で挑戦したのである。

手作り遊び遊具は、なにも「ブンブン風」だけではなかった。低学年の子が作るのは「カスベ風」

男の子の遊びは屋外遊びが中心、「たげんま（竹馬）」「こまぶつ（独楽）」「べっち（面子）」「くぎぶち（釘打ち）」「えのみ鉄砲（エノキの実鉄砲）」「たげとんぼ（竹トンボ）」など…

女の子の遊びは、屋内遊びが中心、「ぎくら（お手玉）」

「はじぎちょ（おはじぎ）」など…

「風揚げ」は昭和十五～十六年頃までは盛んであったが、太平洋戦争が酷となると紙も全て統制され手にはいなくなつた。やつと終戦、西洋紙など手に入るようになったが弱くて風の材料にはとてもならない。その上建物の建築やら農地の開発で風を揚げる場所もなくなり、遊びも家の中で遊ぶTVゲーム型の孤立遊びが主流となり、濱中の風揚げは姿を消した。

しかし、なんとかして風のすばらしさを消してしまいたくないと考えるのは私だけだろうか。

二、「ブンブン風（角風）」

濱中では「ブンブン風」とか「たご」と呼び、特に「酒田風」のように「濱中風」とは呼ばなかった。

風そのものは日本特有のものではなく、世界各地にみられる。外国の風は「洋風」と呼ばれ、日本の風は「和風」と呼ばれる。濱中の「ブンブン風」は「和風」であるが、

「和風」にも北から南までの各地に特色ある風がある。

代表的なものに、^{註（一）} 蝦夷風（北海道）・津軽風（青森）・秋田風（秋田）・酒田風（山形）・大風（新潟）・奴風・鳶風・江戸風（東京）・巴風（静岡）・扇風（埼玉）・蝶風（愛知）・河豚の連風（山口）・勝間風（大阪）・大風（滋賀）・達磨鳥賊（香川）・長崎風（長崎）・マツタクー（沖縄）などがある。

濱中の「ブンブン風」が、何時頃どこから伝えられたかは記録もないし不明であるが、数多くある和風の中で、日本の風の特徴を表す長方形の角風、江戸風（浮世絵を風絵）に一番近い。

^{註（二）} 「角風」が江戸に現れたのは、元禄（一六八八～一七〇四）から享保（一七一六～一七三六）とされ、大風は和紙（美濃紙が最高。日本紙とか木紙とも言う）十二枚貼り、中風は四枚貼り、小風は二枚～一枚貼りがあった。

「ブンブン風」は二枚貼り、四枚貼りが主流。一枚貼りもあったがこれは低学年の風。酒田風のような大風がなかったのは、製作するのが子どもだけだったからかも

しれない。

酒田の郷土史家、佐藤公太郎氏によると、酒田風は江戸期の末に、左官職の人達が仕事の無くなる冬の手間賃稼ぎに作られたのが最初で、明治の中期頃、盛んになったという。

酒田風にもいろいろあり、角風・亀風・人風や子ども用のかすべ（カレイ）風・十文風（一銭風）奴風が作られたという。

角風は別名、ブンブン風と称したというから、濱中のブンブン風は酒田風の流れを汲んでいると考えられる。呼び名も濱中の開祖という口碑のある新潟の山北町中濱では「イカ」といい「タゴ」とは呼ばないことから、新潟から伝えられたとは考えにくい。

「イカ（紙鳶）」「タコ（風）」について、日本最古の方言辞書と言われる越谷吾山の「物類称呼四（安永四年・一七八四）」に「幾内（京都・奈良・大阪・兵庫）」にて「いか」といひ「関東（東京周辺）」にて「たこ」といふ。…揚げることを「上がった（関西）」にては「いかをのぼす」といふ。「江戸」にて「たこをあぐる」といふ。

「東海道（中部・東海地方）」にて「たこをのぼ」といふ。「相州（甲州山梨）」にて「たこをながす」と……

また風のことを「ハタ」と呼ぶのは、隣県の秋田県。他にも青森・伊勢・三重・長崎・熊本地方とある。

風の形・呼び名からも、濱中の「ブンブン風」の系列は、江戸系酒田風と推定できそうである。また盛んになったのはそう古いことではなく明治以降と考えられる。

註（三）東京では、タコを春の初め正月に飛揚するしきりたりのようになっていたが、大阪では五、六月、浜松では端午の節供に風合戦をするしきりたとある。濱中には風合戦などなかったが、揚げる時期は大阪と同じ五、六月頃。中国の「続博物志」に、紙鳶を揚げる効果について「今、紙鳶の糸を引くに、小児、口を張って、仰いでこれを視るに小児の内熱を洩らさしむ」といって、小児専用のようにいつているともある。

濱中の場合はまさにこの文にピッタリ当てはまるが、風は子ども専用ではなかったらしい。

註（四）風は本来子ども遊びではなく、大人の競技用として緒方で大紙鳶を揚げるのが流行、村々の対抗年

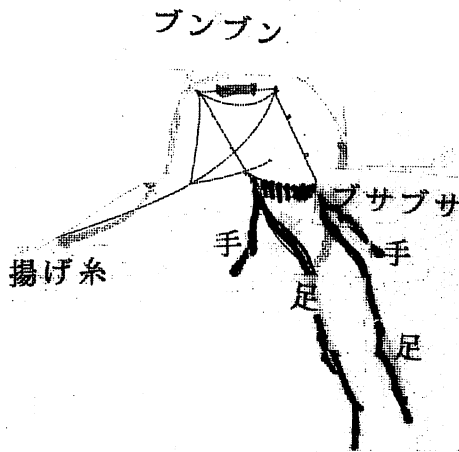
中行事として発達したもので、新潟県の見附市の今町・中之町・三条・白根など各地に歴史ある凧行事として、今日も大がかりな凧合戦が存続してきている。

その凧の大きさは約二間四方、美濃紙九十六枚貼りを限度とするといわれている。とても子どもだけの手に負えるものではない。

註

- (一) 日本凧の会 凧 文溪堂 二〇〇二・三
- (二) 藤原千恵子 図説 浮世絵に見る江戸の歳時記「正月の子どもたち」河出書房新社 一九九七・二一
- (三) 大橋 勇夫 風俗辞典「紙鳶」東京堂 昭和三十九年十月
- (四) 日本民俗学会 民俗学辞典「柳田国男 蝸牛考」東京堂 昭和四十一年二月

三、「ブンブン凧」の手作り



*道具

・肥後守(折りこみ式の小刀)

・切り出し(はがねの先が斜めに刃になっている小刀)

*材料

・日本紙(凧紙・ブンブン紙・フサフサ紙)・墨汁・

水彩絵の具(凧絵)

・飯粒と布切れ（竹骨を風紙に貼り付ける接着材）

・竹「まだけ・もうそうちく」（風の骨材）

・藁（風の足・風の手の用紙の縄材）

・風糸・揚げ糸（木綿糸）

・揚げ糸巻（自作が容易でないので市販品を大山馬町の市等で求める）

*工程

①風の骨にする竹切り。村の菩提寺「正常院」の境内周辺に自生している「マダケ（ほもの科）」を切り出して切りとってくるのが最初の作業。時には寺で栽培している竹を切り、住職から怒鳴られることもあり

②風の大きさ、和紙を何枚にするかを決め貼り合わせる

③風の骨作り。風絵の寸法に合わせて、竹を割り細く切り出しと肥後守を使って削る

④風紙に骨を貼り付ける。貼る骨の数は風紙の大きさに違ってくる。貼る時の接着剤は飯粒。飯粒を布切れに包みこの中に竹骨を入れ何回も擦る。五―六回

も擦ると粘着しやすくなる。

今日のような化学接着剤など無い時代の生活の知恵

⑤骨を貼付た風

紙に風絵を描く。それぞれ好みでいろいろあったが、一番多いのが武者絵

⑥目糸付け。上目糸二本と下目糸一本の三本をまとめ、風の中心にくるようにして結ぶ

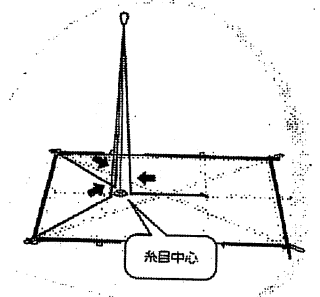
⑦張り糸付け。風を裏返しにして、上の横骨に取付け風をそらせる

⑧上部の張り糸に「ブンブン紙」下部に「ブサブサ紙」を取り付ける

⑨縄をなつた「風足」と「風手」を取付けたら、「風揚げ糸」を「目糸」に結び完成

★濱中風「ブンブン風」作りの達人、菅原松雄氏の談を参考にする。

上目糸と下目糸を3本まとめ
て押さ、糸目中心の上にくる
ようにして、輪を作って結ぶ。



四、凧の歴史的背景

凧の起源は定かではない。一説には紀元前二三〇年頃、ギリシャの数学者アルキメデスが創案とか、古代中国では、漢の武帝韓信が凧を揚げて敵陣までの距離を測り敵状視察用に作ったのが起源であるとか古代から東西を問わず世界中に凧はあつたらしい。

註(五) 日本にいつごろ伝わったか不明であるが、平安初期、源順の「倭名類聚抄」(九三一〜九三八)には紙鳶を中国語で紙老鴟と書き、その註訓に「世間、紙勞之」とある。このような文献から凧の発祥地は中国か東南アジアといわれ、このシロウシもしくはイカが、鳥の名であるところからみて、紙鳶(凧)名は鳥類の形象によつたものであるということがわかる。

註(六) 室町の末期に入ると鳥賊(イカ)の形に作られるようになり「鳥賊幟(イカノボリ)」と呼ばれるようになった。

江戸期になると「紙鳶」と書き「イカノボリ」と言い、

承応年間(一六五二〜一六五五)には宮廷の遊びとして西から流行した「紙鳶」はさまざまな工夫がされ、庶民の間に大流行。

形が半月形で長い足がついていたので「タコ」にも「イカ」にも見えたという。

「鳥賊幟」を下略して「鳥賊」とも言っていたが、江戸では早くから「鳥賊幟」を「凧幟」と呼び、呼び名が「タコ」と「イカ」、庶民の間では呼び名で対立したとある。「イカ」が「タコ」になった原因は、互いに競って凧揚げ、

凧が落下して怪我人続出おまけに喧嘩。このため明暦元

年(一六五五年)一

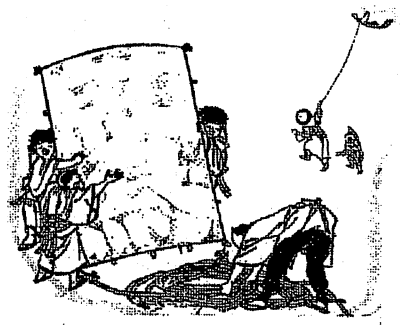
月二十日に「市中紙鳶あげ禁止令」がだ

され、翌年には「市中子供タコノボリ禁

止令」の高札が街角

に立てられた。この

時から江戸では「イカ」が「タコ」と呼



北斎絵事典 人物篇

ばれるようになった。

風の呼び名は、今日でも様々、関東では「タコ」、関西は「イカ」、畿内は「イカノボリ」、伊勢は「ハタ」、水戸地方は「トンビ」、西国は「タツ(竜)」、長崎は「ハタ」、隣県の新潟は「イカ」秋田は「ハダ」と呼ぶ。両県の間にある庄内が「タコ」。江戸期、北前船が酒田にもたらしたのかもしれない。

本来、風は軍事兵器として、戦闘の開始・停止の合図、人が乗る戦闘器として利用され、また宗教用具として雲の中に風が入ると吉兆としたり、厄除けのため糸を切りわざと飛ばしたりする風習もあった。

また、江戸時代には浅草観音本堂の屋根瓦葺き替えに、風を使ったという記録も残されているというから、風は今でこそ遊びであるが、往時は日常生活と深い関わりがあったのである。

日本の風の特徴を表す角風が現れたのは、元禄から享保に移った頃、錦絵から一枚の絵をとった長方形の風、華麗な絵模様の武者絵・錦絵を描いた絵風、文字一字を書いた文字風、さまざまな細工を凝らした細工風、から

くり風など、その種類、美的センスにおいても世界で類を見ない水準を誇る和風である。

和風風揚げ大会の起源も古い。現在でも全国で四〇～五〇の大会があるというが、鎌倉期の愛媛・五十崎、永禄年間に始まったという静岡・浜松、元文二年からという新潟の白根などがある。

今日、国際風あげ大会が、日本風の会の主催で毎年行われている。趣旨の中に、「風あげには安全な広場と公害のないきれいな空気が必要です。それらを子どもたち確保するのは大人の役目です」とある。

註

(五) 坂本 太郎 風俗辞典 東京堂 四三七頁

(六) 三浦 竜 お江戸の事情 青春出版社 四六〇四八頁

五、結 び

遊び、遊ぶことは古来から大人も子どもも親しんでき

たことは今も昔も変わらない。

平安期の「源氏物語」に、「万の物を心に任せて作り出だすも臨時のもてあそびもの」とか「打ち解けたる御んわらはあそびに昼など渡らせ給ふことはあながちにおはします」などとみえ、古より「もてあそびもの」「弄び物」「わらばあそび（童遊び）」が行われてきたことがわかる。

オランダの歴史学者ホイジンガーは「遊戲の精神を欠いた文化は崩壊する」とまで喝破している。

長い戦国の争乱も治まった江戸時代に入ると、町人の社会を中心に遊びの種類も複雑多様になってくるが、野外遊びの代表的なものが凧揚げであろう。

凧を作る、凧を揚げる。そこには創造という文化の本質があるのではなからうか。

「伝承遊び」と単なる年寄りの郷愁として言うのではない。そこには「創造の遊び」が秘められているのである。仲間と先輩と語り合い、道具の使い方を教わりながらの手作り「ブンブン凧」。形はどうあろうとも、空高く舞う凧の姿を今の子どもたちに体験させたい。

夕日の沈む日本海に「ブンブン凧」を揚げたあの感動

を子どもたちにも。

「たかが紙鳶　されど凧　は多誇」

参考・引用図書文献

阿部 三郎 古語辞典 旺文社 昭和四六・一〇・六

遠藤 ケイ こども遊び大全 講談社 一九九七・一

二・一六

加太 こうじ 子どもの四季 河出書房新社 昭和

五六・一二・四

くもん子ども研究所 浮世絵に見る江戸の子どもたち

小学館 二〇〇〇・一一・二〇

坂本卓男 昔遊び図鑑 東京書籍 平成十四・六・一七

台東区下町風俗資料館 下町の子どもの遊び 平成

四・十一

ティヴィッド・ペラム 世界の凧 美術出版社

一九八二・一〇

日本民俗学会 民俗学辞典 東京堂出版 昭和四一・二

日本風の会 風 文溪堂 二〇〇二・三

日本の伝統文化研究会 日本の常識辞典 花の番外編

一九九五・四

農民生活史事典 二三八〜二四五頁

藤原 千恵子 図説浮世絵に見る江戸の歳時記 河出書

房新社 一九九七・一一

森山 茂樹 中山 和恵 日本子ども史 平凡社 二〇〇

二・五

樋口 清之 生活歳時記 「遊びの歴史」 三宝出版社

昭和五七・五